

Title	十七・八世紀ベトナムにおける南北対立の歴史とその分析
Sub Title	A study on the internal strife of Vietnam in the 17th and 18th Century
Author	陳, 荊和(Chen, Ching-Ho) 大沢, 一雄(Osawa, Kazuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.4 (1966. 3) ,p.81(515)- 94(528)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

十七・八世紀ベトナムにおける南北対立の歴史とその分析

陳 荆 和

(大 沢 一 雄 訳)

周知のように、千九百五十四年、ベトナムは分割され、爾来、南北の二つのベトナムは相互に対立、抗争し、おのおのがベトナムにおける合法的政権をもって任じている。

これは、東西両陣営間の冷戦の一つの具体的な現れで、ドイツ、韓国の場合と同様、現代国際政治史上の変態的局面であり、同時に、当自国の人民にとっては、寔に悲劇というべきで、人々は、この悪夢がすみやかに終結する事を切望しているにも拘らず、我々の希望に反して、ベトナムの事態は、時とともに、ますます悪化しているのである。

特に、南ベトナム内部の、いわゆる越南民族解放戦線の活動は次第に活潑化し、これに対するアメリカも又、南ベトナム政府を軍事的に援助する一方、連日北ベトナムに対して爆撃を加え、戦局は日々激烈さを加えながら、双方の死傷は増加し、国際関係も複雑化し、今後の状勢の変化については想像を許さないものがある。

ベトナムの現下の、このような惨苦の場面は、常に筆者をして

十七・八世紀ベトナムにおける南北対立の歴史とその分析

二・三百年前の、ベトナム史上における、もう一つの南北の対立の歴史を想起せしめるのである。

この対立は、規模においても、時間の長さから云つても、又、国際関係の複雑さという点からも、現今の対立と殆んど変りがないと云えるであろう。しかも、当時の状況の変化を詳細に観察すれば、更に少なからざる同一性を認めることが出来る。

筆者がかゝる主題を選んだのは、読者に十七・八世紀のベトナムにおける南北対立の局面を紹介し、読者が、ベトナム近代史に対して更に一段と明らかな理解を得らるゝ事を助けたいと希望するからに他ならない。

ベトナム史は大雑把に云つて、三期に分ける事が出来る。

第一期は北属期で、秦始皇が西紀前二百十四年に三郡(桂林・南海・象郡)を開設したのに始まり、漢武帝の九郡(南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・日南・珠崖・儋耳)の設置(西紀前百十年)、後漢・三国・魏晋南北朝・隋を経て、唐朝末年に至る期間で、今のトンキン及びアンナン地方の一部は中国領であつた。

その間、大規模な叛乱が屢々発生したものの、大体中国の歴代王朝の直接統治下にあつたのである。

この期のベトナムの歴史は当然、中国史の一部をなしており、ベトナム人と漢人とを問わず、すべて中国の人民であつた。

第二期は五代の呉権の独立(西紀九百三十九年)より以後、丁・前黎・李・陳・黎(後黎)、西山、阮の諸王朝を経て千九百四十五年に至る時期、すなわち、ベトナム独立王朝期である。

この時期に在つて、ベトナムの領域は次第に拡張し、阮朝時代の初期には、トンキン・アンナン・コーチシナの三域を支配するに至つたが、この第二期には、短期間の胡季犛の篡奪、及び、これに続く十数年の明朝に服属した時期(千四百十四年~千四百二十七年)、更に、黎朝の興起、その百年後の莫登庸の篡奪の時期が含まれるが、莫氏が打倒され、黎朝再興後久しからずして国内に南北対立を現出したことは注意すべきである。

十九世紀の初年に阮朝がベトナムの統一を完成して八十年にしてベトナムはフランスの保護国となり、阮朝自体千九百四十五年まで続いたとは云え、事実上、独立国としての主権を喪失してしまつた。

第三期は共和国期である。ベトナムは共和国として第二次大戦終了後の千九百四十五年八月末、ハノイにあつて成立を宣言し、これと同時に国家の独立を回復した。

しかし、この民主共和国はベトナム独立同盟、すなわち越盟(ベトナム)を中核となすもので、その領土はコーチシナを抱括していなかつた。

しかも、これに続き、約十年のベトナム・フランス戦争があり、千九百五十四年、ジュネーヴの和議が成立して、やつと両国が停戦し、列国も暫定的に南北ベトナムの現政権を承認、二年後には全国の人民投票により南北ベトナムの統一を実現することが規定されていたにも拘らず、この規定は未だ実施されるに至つていないのである。

現在のベトナム民主共和国とベトナム共和国の対立・抗争の原因はこゝにもとめられる。

かゝる状勢の推移からみるならば、ベトナム共和国は、恰も嬰兒が重病にかゝつたのと同じで、生命の前途の程は樂觀することが出来ないという事が理解されると思う。

ところで、本論に入ると、第二期にあつて、最も長く続いた王朝は黎朝(千四百二十八年より千七百八十九年)で、三百六十二年続いた。しかし、この王朝は黎の太祖の即位後、丁度百年目に一人の権臣莫登庸のために篡奪されたため、黎朝の正統は五年間断絶してしまつた。

莫氏篡奪より三年目の千五百二十九年、黎朝の旧臣阮滄はラオスに逃れ、黎朝の旧臣を糾合し、その復興を計画し、千五百三十二年、黎の昭宗の子寧を探しあて、これを擁立して莊宗とした。

この後、全国の豪傑が前後して帰順し、声勢大いにふるい、一方においては、機を伺つて莫軍を攻撃し、徐々に支配圏を拡げ、他方、屢々明朝に遣使して莊宗が正統のベトナム国王であること

を訴え援助を求めた。

阮滄の部下の中で最も有力な協力者は、阮滄の子阮潢と、娘婿の鄭検であつたが千五百四十五年、阮滄が突然暗殺されてより後、その婿鄭検が諸軍を率いて莫氏に対する作戦を強化した。

双方ともに絶えず交戦を続け、五十年を経て明の万曆二十年（千五百九十二年）に至り、鄭検は、都城の昇竜（ハノイ）を奪回した。莫氏は退いて高平に拠り閉境自守し、清の康熙六年（千六百六十七年）に滅亡した。

かくの如く、黎朝は復興したとはいえ、却つて内部において一種の政治的危機を醸し出すことになつた。これは阮潢と鄭検の反目抗争である。

潢は阮滄の子であり、自ら父の死後は軍事・政治についての主導権をもつべきだと信じており、鄭検が軍隊を統率することに強い不満を感じていたのである。

又、一方において鄭検は日々に権威を増大しつゝあつたものゝ、阮潢がたてた戦功により次第に声威を増すことに対して深い不安と嫉みを抱いた。

潢は鄭検のかゝる感情を察知し、鄭氏のために暗殺される危険を避けるために、その姉の玉宝（鄭検の妻・阮滄の娘）を通じて順化に赴いて、その地に鎮守することを請うた。

当時の人々からみれば、順化は今のチベット・青海・西康等の土地と同じで、誰もが行くことを望まない僻地であつた。

鄭検は、それが遠隔の地に位置することをさいわいに許可を与

十七・八世紀ベトナムにおける南北対立の歴史とその分析

えて、阮潢を順化に赴任せしめた。

こゝにおいて、当時三十四才の阮潢は千五百五十八年、清化地方の志願者や一族の者を率いて順化に赴き、その地の開拓に努力し、人民を愛撫して、深く民心を得ることに成功した。

この後、千五百九十二年、黎軍が東都（ハノイ）を恢復した時、阮潢は一度北上して、東都に八年滞留したが、千六百年、再び順化に帰任し、その後は、その娘の玉秀が鄭柑に嫁した際にも北へは戻らず、以後、子孫が相継いでその地位を襲い、鄭氏の支配を受けることはなかつた。

千六百十三年、阮潢の第六子阮福源が嗣ぎ、十年後の千六百二十三年、鄭検は退いて、その子柑が継承した。

千六百二十七年以降、双方は南布政（今の河静）一帯において屢々戦火を交えたが、四十数年を経て、千六百七十二年、両軍は休戦して灑江（Song Giang）を境として対立状態を維持することになつたので、ベトナム史上、この対立期を以つて南北対立、或いは鄭・阮分争時代と称している。

この時期に北方の鄭氏は完全に黎朝の実権を掌握し、代々国主（chúa）と称したので、歴代の黎王はたゞ空位を擁するのみであつた。

鄭主は新に公署を開き「府僚」とよび、又「六番」を設けて黎朝の六部にかえたほか「掌府事」「署府事」を設け兵政の責任を負わせた。

南方の阮主は阮潢以来、代々南方の開拓に努力し、徐々にチャ

ンパ人の土地を侵略し、千六百十一年には富安を、千六百五十二年には慶和を、千六百九十七年には平順をとり、又、カンボジアが弱体であるのに乗じ、その内政に対して屢々干渉を企てた。

千六百七十四年、カンボジアを二つに分け正王・副王の両主をたて、もつてこの国に対する統制を容易ならしめ、以後、明末の中国の集団移民の力を利用してカンボジアにむかつて侵略を続け、たため、千七百五十七年には後江より、シャム湾に至る領域は阮氏に所屬するに至つたのである。

阮氏は、はじめは総鎮と称していたが、第七代阮福淵の千六百九十二年以降国主と称しはじめ、千七百四十四年、第九代阮福潤の時代より国王と称したが、まだ国号・年号は建てず、依然として黎朝の正朔を奉じていたのである。しかし、實質的に一個の独立国家であつたから、中国人や日本人は広南国とよんでいたし、ヨーロッパ人は交趾交那とよんでいたのである。

阮氏の治所は、はじめ広治河岸の愛子にあつたが、千五百七十年、茶鉢村（愛子の東北二公里の地）に、千六百年には更に葛營に遷つた。そして、千六百二十六年、阮福源は治所を広田県福安社にうつし、營を府に改めた。

千六百三十六年、阮福瀾は香茶県金竜社（香江のほとり、順化の西南二公里の地）にうつり、千六百八十六年、阮福濂は新府を東隣の富春社に建設した。

阮主の「府」（正營）は三司からなりたつていた。

① 舍差司 都知及び記録（阮主の令旨及び各種の公文書を取

扱う。）

② 将臣吏司 該簿（徴税・食糧及び物資の徴発を取扱う。）

③ 令吏司（祭祀時務を掌管する。）

鄭・阮両主の対立時代にあつて、双方は国境地帯に重兵を配置し、国境を閉じて自守したので、当然のことながら両地域の人民の往来は禁じられ、通商関係も停頓してしまい、双方の通商はたゞ中国・オランダ・ポルトガルの商船を介して行なわれるのみであつた。

このような外国商人の活躍によつて、北方の雲屯、南方の会安は急速に繁栄してきたのである。

従来、私たちは、これ等諸港の繁栄の原因を中国・日本間の中継貿易に帰していたのであるが、それと同時に、この両港がベトナムの南北の物資を集積する重要地点であつて、南北両地域の住民の間の直接的な自由貿易が禁止されたために、双方の住民が外国船を利用して、それぞれ相手方の土産品を獲得していたことも繁栄の一因をなしていたという事実に対しても注意を払わなくてはならない。

中国船を除き、ポルトガル、オランダの商人は、ともに両地域に来往して通商したが、この両国はアジア貿易の主導権をめぐつて激しく対立していたので、鄭・阮両主は、等しくこの点に着眼し、鄭氏はポルトガルの力を利用して阮氏を圧迫せんとし、阮氏はオランダの勢力を利用して鄭氏に打撃を加えんことを図り、双方ともに外国勢力を抱き込むことに努力した。

しかし、ベトナムにやつて来たポルトガル人、オランダ人は商利を重んじ、公然と表面に現れて援助や干渉に乗り出すことを躊躇したので、時とともに、これらの外国とベトナムの関係は疎遠になり、千七百年以後、オランダ人は再びベトナムに來航することとはなくなつてしまつたし、ポルトガル商船も次第に遠ざかつていつたのである。

ベトナム史書によつても南北ベトナム間の尖鋭な対立關係を証明することの出来る苦干の事實を挙げうるのである。たとえば、千七百二年、阮主福潤は広州長寿庵の積大仙の提議を容れて、二人の広東人黄辰・興徹の兩人を広東に派遣し、両広總督を経由して清廷に向い冊封を求めたことがある。

清の聖祖は黎朝がまだ存在していることを理由に、その要求を拒絶したのであるが、この事實によつても阮主が国際社会における地位をたかめることによつて鄭氏に対抗しようとしていた事が知られるのである。

千七百十六年、阮福潤は又、福建商人平及び貴という二人の者を北ベトナムに派遣し、鄭氏の虚実を探索せしめたが、このことは南北両ベトナムの情報工作が相当激しく展開されており、かつ、ベトナム在住の華僑の少なからざる者が、この種の工作を担当していたことを証明しているといえるであろう。

この様な南北の対立關係は約百年に及んだが、千七百七十三年に至り、阮主の領土内に一つの叛乱が勃発し、やがて、これはベトナム全域に亘る大乱の導火線となつた。

十七・八世紀ベトナムにおける南北対立の歴史とその分析

この叛乱は、千七百六十五年、阮主の福潤が死去し、その子で年齒僅か十二才の福淳が継承し、政權が摂政張福巒の掌中に歸した事に起因している。

彼は專制的で、政治を擅にし、かつ、苛斂誅求、搾取を極わめたので、国内は漸く不安な状態を示しはじめ、民心も變革を望んできた。千七百七十三年に至り、帰仁附近の西山村（タイン）の阮姓をもつ三人兄弟、文岳・文惠・文侶は、「阮を扶けて張（福巒）を滅す」という名義をもつて兵を興し、帰仁に拠り、中国の天地会の徒の援助をえて、また、く間に広義以南の地を支配した。

これにより、ベトナム政情は更に複雑を加えることになつたのである。

北の鄭主（鄭森）は、この機に乗じて南下し、千七百七十四年の末には富春城を攻略したため、敗走した阮主（阮福淳）は海路嘉定にのがれて、そこにおいて恢復を謀つた。

西山の阮文岳は、一時に腹背両面に敵をうける不利を避けるために、一旦鄭主に降り、広南鎮守の職をえて、自らは専ら阮主を討滅することを謀り、千七百七十七年には嘉定城を攻略、福淳及び多くの阮氏一族を殺害し、翌年（千七百七十八年）には帰仁において自立して帝と称し、泰徳と建元した。

こゝに至つても、南北対立という事態は依然として存在したのであるが、南方の阮主が西山の阮氏と交替したという点だけが、従来とは違つた点であつた。

八年後の千七百八十六年、西山党と鄭主の共存關係は破れ、西

山党の第二弟阮文恵は大軍を率いて北上、富春・河静・清又を経て、勝に乗じて昇竜（ハノイ）に入城したため、鄭氏の軍は敗走し、鄭主・楷は自殺し、「府僚」・「六番」の官員はすべて逃散してしまつた。しかし、文恵はトンキンの政権を黎朝の愍尊（昭統）に委ね、短期間の中に兵を率いて南へ引き揚げていつた。

この措置は、文恵が兄文岳の誤解をうけることを恐れたこと、清朝を刺戟して、その干渉を惹起することを警戒したことによるのである。

かゝる段階にあつては、北方の黎朝が存在しているとはいへ、事実上、ベトナムの覇主は西山の阮氏であつたのであり、若しも仮りに西山の阮氏が再びその気になりさえすれば、ベトナムを統一して南北の対立に終止符をうつことは決して困難なことではなかつたのである。

しかるに西山党の陣営の中では、文恵の北伐成功後間もなくして、兄弟間の不和が表面化した。特に文岳・文恵との間で充分な協力・団結が出来ず、一年後の千七百八十七年、西山の三兄弟は、その版図を分割し、文岳はアンナンの南部地方を領有して中央皇帝と称し、文恵はアンナン北部（広南以北）及びトンキン南部（又安以南）を支配して北平王と号し、文侶はコーチシナを領し、東平王となつた。

このためにベトナム情勢が一時に騒然としてきたことは甚だ遺憾なことであつた。

西山三兄弟のこの様な処置は西山政権にとつて非常に大きな誤

謬であつたと同時に、将来の失敗の原因をなしたものであるが、反面、西山党はまだ黎朝を尊重し、トンキン地方を敢えて合併するという意志をもつていなかったという事を物語つていふといふよう。

北方の黎朝は、西山党の、この好意を感謝し、慎重に行動すべきであつたのであるが、トンキンの鄭主の残存勢力は機を窮つて行動を開始しようとして西山党の謀士阮有整と結び、愍尊を抱き込んで鄭氏の嘗つての地位を恢復しようとした。彼等は西山党の比較的寛大な態度をもつて、西山党が軟弱であると誤解して種々の下策を弄し、烏滸がましくも、人を派して文恵に対して清・又両地方の還付を要求するに至つた程であつた。

又、清朝に対しても上表して、軍事援助を懇求した。

而して、当時の清朝の皇帝は派手好きで、気の強い高宗（乾隆帝）であつたので、帝はベトナムに干渉せんとして康福安・孫士毅に下令し、大兵を擁して入越せしめ、昇竜（Hanoi）に駐屯せしめた。

これ等の一連の動きは文恵を強く刺戟する結果となり、彼は順化において情報を見ると、すぐに自立して帝と称し、光平と建元し、千七百八十九年、大挙して北伐を敢行、清軍を昇竜城外に急襲し、大いにこれを撃破した。

このため愍尊（昭統）は城を棄て、北に脱れ、中国に亡命したが、間もなく北平で客死した。鄭氏の残党も或るものは捕えられ、或るものは殺害されたので鄭氏の勢力は完全に一掃されてしま

い、黎朝も又、これにともなつて覆滅した。

太祖が興つてより、昭宗に至るまで九代百年、又、莊宗より昭統に至る間、十六代二百五十七年、黎の国祚は三百五十七年にて滅亡したのである。

黎朝の滅亡により、千六百二十七年以来の南北ベトナム間に存在した対立状態も百六十二年にして終りを告げたのであるが、こゝで注意しなくてはならない点は、阮文恵が清軍を撃退し、黎朝と鄭主が滅亡した頃、ベトナム境内にあつて、別の南北分争の氣運が醸成されつゝあつたということである。

では、それはどんな局面であつたのであろうか。以下簡単に触れてみよう。

上述したように千七百七十七年、柴棍 (Saigon・嘉定) は西山党により攻略され、阮主福淳及びその一族の者が遭難したが、福淳の姪阮福映は幸いにして危険を脱して河仙に逃亡したので、阮氏の旧臣は福映を推戴して大元帥撰国政とし、同年末には隙に乗じて柴棍を回復し、西山党に反攻する基地となした。

よつて、この時の南北の分争は新興の西山阮氏と阮主の残存勢力間の抗争であつた。

その柴棍占領以後、数年間西山の阮文岳が政治に倦み、文恵もまたトンキン対策に忙殺されていたので、阮福映はこの地にあつて地盤をかためることが出来たのである。

しかし、千七百八十二年三月、柴棍が再度西山党のために攻略されたので福映は一時逃れたが、間もなく再び柴棍を恢復するこ

とに成功した。

しかし、千七百八十三年二月、又々、柴棍は陥落したので、福映ははじめ富国島に、更に崑崙島にのがれたが、また富国島にかへつた。このように西山党の追撃が甚だ迅速のため福映は追いつめられ、この時期に彼は歐人に援助を求めるところを決意した。

そこで福映は長子景をパリ外国伝教会所属の河仙にいたフランス人教士、ピニョー・ド・ベーヌ Pigneau de Behaine (Eveque d'Adran) に託し、ともに歐洲に赴いてフランス国王に対して援助を求めように要請した。

しかる後に千七百八十四年二月、彼はバンコックに亡命したが、同年六月、シャムの水兵二万人、戦艦三百隻を借りて柴棍を攻撃、一時はその地を回復したが、同年末には文恵のため撃破され、翌千七百八十五年四月にはバンコックに逃げ帰つた。

二年後の千七百八十七年七月、福映はひそかにコーチシナに戻り、天地会の何喜文等の助けをうけて各地を転戦し、千七百八十八年八月はじめに嘉定を回復した。

一方、千七百八十七年、アドラン司教は太子景をともなつてフランスに到着し、八方奔走してフランス国王ルイ十六世に謁見し、極力ベトナムを援助することをすすめたので、同年十一月、ベルサイユにあつて仏・越攻守同盟条約が締結され、司教は福映にかわつて署名し、又彼はフランス国駐越專員に任ぜられた。

同条約の主要な点は次の通りである。

① フランスは陸海軍をベトナムへ派遣して阮主の疆域を恢復

することを援助する。

② フランスの軍事援助に依るために、阮主はツーラン、プロコンドール島を割いてフランスに与える。

③ 阮主の領域内に内乱が発生した場合、フランスは阮主に対し軍事的援助を与える。

④ 阮主はフランスに、阮氏領域内において自由に商業活動に従事する権利を与える。

条約調印後、フランス国王は援軍を組織する権限をインドのポンドイシェリーの仏軍司令官コーンウェイ (Conway) に委ねた。

ところが、コーンウェイはベトナムに対して軍事的援助を与えることは得策でないと判断して、軍隊の派遣を承知せず、更に、フランス国王に対してその決定の取り消しを求めたのである。

しかし、アドラン司教のベトナム援助の志は甚だつよく、インドにおいて独力で百余名のヨーロッパ人を召募して(大部分はフランス籍)、国際的な志願軍を組織し、自費で武器、弾薬を購入し、千七百八十九年には柴棍に帰着した。

司教がベトナムに戻る一年前の千七百八十八年には、福映は孤軍奮闘し、既に柴棍を回収し、メコンのデルタ地帯より西山党の勢力を駆逐していたからである。

司教はこの戦争中、福映の軍事顧問となり、ともに国事を議し、王子景を教導し、志願兵を率いて作戦に参加した。

一方、西山三兄弟の中、文侶は早世したが、文岳も即位後政治

に倦み、文恵が事実上西山党の領袖であった。

文恵は千七百八十九年に清国の軍隊を撃退した後、遣使して清朝に謝罪し、降伏することを申し入れた。

清朝側では、高宗が和坤・康福安等の建議を入れて、文恵を安南国王に封じたので、文恵は父安に都城を建立し、大いに制度の改革に着手したが、惜しいことに在位五年にして千七百九十二年に卒した。四十才であった。

この後を襲った太子の光纘はやつと十才になつたばかりであり、翌千七百九十三年には文岳も又世を去つたので、この西山朝は重心を失い、一切の政務は太師斐得宣の手を経ることになり、得宣の権威は日にたかまり、日毎に専横さを加え、内部は統一を失なつていつた上に又、光纘と文岳の継承者たる文宝とが互いに協力することも出来ずに、日増しに疎遠の度を深めていつたという事情もあり、更に南方の阮主福映の勢力が年々増強されていたのであるから、西山党の形勢は次第に悪化していつた。

千八百一年に至り、阮主の水軍は帰仁港外にあつて西山党の水軍を撃滅し、勝に乗じて富春をとつたため、阮光纘は城を棄て、北へのがれた。

次ぐる年(千八百二年)五月、福映は富春にあつて登極して嘉隆と建元し、大挙して北伐の軍をおこして河静・父安・清化を経て順調に昇竜に入つた。

光纘及びその両兄弟は捕えられて殺害された。

こゝに至り福映はベトナムを統一し、同年中に鄭懷徳等を派遣

して清にいかしめ、清廷に対してベトナムの統一を報告し、冊封と南越を国号とすることの許可を請うた。

翌千八百三年、清の仁宗は遣使して、福映を封じて安南国王となし、国号を越南とすることを許した。

千七百七十七年以來の南北分争の局面は二十五年を経て完全に解消されたのである。

以上が、十七・八世紀におけるベトナムの南北分争の局面の概況であるが、こゝで私は更に一步をすすめて、こゝ二百年の歴史的変転の種々の要因について分析を加えてみたいと思うのである。

二百年に亘る南北分争は二つの段階に分けることが出来る。第一段階は千六百二十七年より千七百八十九年に及ぶ百六十二年間であり、これは黎朝治下の鄭・阮両主が抗争・対立した時期である。

第二段階は千七百七十七年より千八百二十二年までの二十五年間で、新興の西山政権と阮主の復興勢力とが争つた時期である。

第一段階の対立時代が比較的長期間にわたつた原因として次の諸点を考えることが出来るよう。

- ① 鄭・阮両主は俱に黎朝の伝統的權威に対して充分尊重する意志を有しており、これを侵害することはしなかつた。黎朝自体、衰えて政治上の権力は全くなかつたにもかゝらず、黎朝が嘗つて明軍を撃破して山河を回収し、ベトナム人の自由・独立を恢復したという功績は不滅のものとして残り、民

十七・八世紀ベトナムにおける南北対立の歴史とその分析

心も完全に黎朝に帰一していた。

- ② 此の時期は丁度、清朝の初期から中期にあたり、清朝の勢力は急速な發展途上にあり、北方の鄭主は清朝勢力の南下に対して防備策を講じない訳にいかず、又頻発する内乱に対しても応接しなくてはならなかつた。(双方が休戦した千六百七十二年は康熙十一年で、翌十二年即ち千六百七十三年、三藩の乱がおこつた。)

一方、阮主の物力・人力は鄭主のそれに比して、やゝ劣つており北伐する力に欠けていたので、南方に向つて發展し、弱少民族である占人や高棉(カンボジア)の土地を侵略することにつとめた。

- ③ 当時のヨーロッパの勢力、特にオランダ・ポルトガルの両国は、その商業活動の主要目標を中国及び日本におき、ベトナムに対して深い関心は抱いていなかつた。

第二段階は新興勢力である西山の阮氏と阮主の復興勢力の間の闘争であるが、この時期は短かく、かつ、その対立は激烈であつた。

その原因として次のことが挙げられる。

- ④ 双方ともに近代武器を採用した事、特に火器の性能は向上し、又近代的作戦方法が採用された。
- ⑤ 阮主政権はコーチンナに基礎をおき、基地を建設したが、この土地の人民はすべて中部のアンナン地方よりの移民で、阮主に対して好感を抱いていた。又、デルタ地帯の屯田制が

成功した事、辺和・柴棍等各地の華僑が経済的支援を与えた事、及び、呉静仁、鄭懷徳等の華人が内政・外交の各分野において援助を与えた事、更にアドラン司教を中心とするヨーロッパ志願軍の支持のあつた事等々、皆有利な点であつた。

◎ 反対に西山党はアンナン地方の人民の支持を得ることに成功したものの、トンキン人民の支持を得るまでに至つていなかつた。トンキンは久しく黎朝の地盤で、人民は黎朝に対する思慕の念を失つていなかつたからである。

又、西山自身、内部の勢力が分散して、特に文恵の死後には内部争いはじまる等のがあり、戦力、物力を集中して阮主に対応することが出来なかつた。

次いで、この時期に活動した人物について比較、検討してみよう。

一百余年に亘る鄭・阮対立時代にあつて、黎朝の権威は高々と上にあり、阮主・鄭主は自己の力の限界を知つており、祖先伝来の地位を墨守して自家の権威を拡張することに汲々としており、其間、阮福淵(明王)や鄭森のように相手方を滅亡させようと計画、実施したものはあつたが、其理想はたゞ敵対者を打倒することのみであり、南北ベトナムを統一して国を救ひ、民心を安んじようという意志はもつていなかつた。

この点からみても、後期の南北対立という状態の中にあつて、西山の阮文岳・阮文恵・阮主の福映などは傑出した人物であつたといえるであらう。

阮文岳兄弟は帰仁附近の符離県西山村の出身である。

帰仁は東西洋考の中で云うところの新州であり、元代より中国と交通関係のあつたところで、特に明代以降、中国商船は頻繁に該地に來航し交易を行なつていたのであるから、阮氏兄弟は布衣より身をおこしたとはいえ、単なる田舎者ということは出来ない。

しかも、阮文岳は以前に雲屯の税関吏をつとめたこともあり、外国——特に中国——の商客との接触がすこぶる多く、国内及び外国事情について相当に豊富な知識を有していたであろう事は想像に難くない。

中国の諺に「秀才造反」というのがあつて、これが必ず失敗することを云つており、書生が世事にうといという事を笑つたものであるが、近世以来、ベトナムでは税関吏にして皇帝になつた例があり、中国では図書館員であつたものが国家首席になつてゐる。

考えてみれば、それは道理にかなつたことも云える。

税関・図書館はすべて外国へ通ずる門口であつて、前者は物資上の玄関であり、後者は精神上の門戸であるからである。

たゞ、文岳・文恵の二人の中で感慨・見識・政治素養・軍事能力について論じてみた場合、やはり文恵は偉大であり、真に時代を代表する人物で、ベトナム史上、この様な人物は二人とは現れないのではあるまいか。

いくつかの事実を挙げてみよう。

文惠は登極以後、文人・学者を優遇し、非常に字喃チナムを重視して、ベトナム人は外国の語文を借用することなく、必ず自国の文字を使用し、以つて民族精神を養成すべきであると考え、科擧の題目、試卷にはすべて字喃を採用することを命じたのである。

この点からみても文惠は一個のすぐれた民族主義者であり、又理想主義者でもあつたことを認めることが出来るであらう。

又、千七百八十九年に清軍を撃退してより以後、彼は清朝に対して降伏し、冊封を請うたが、その本意は時間を稼いで中国に侵略する機会のを俟つにあつたのである。

少なからざる証拠の吾人に告げるところによると、文惠は極めて成吉思汗を崇拜しており、蒙古とベトナムは中国周辺の所謂「蛮夷」であり、而して、蒙古は中国に入り、中国を支配していたのであるから、蒙古よりも文化・社会水準の高いベトナムが中国を統治し得ない筈はないと考えていたのである。

この種の我々中国人にとつて非常に危険な欲望に基づいて、文惠は戦争の準備をし、壮丁の数を確保するために全国の各社村に命じて丁簿を重編せしめ、一律に登録して、各個人に「天下大信」と刻印し、姓名・本籍等を記入してある「信牌」を支給し、誰でも「信牌」を所持していないものに対しては一律に軍に編入するか、処罰するかの措置をとつた。

これは世界で最初の身分証制度といえる。

千七百九十二年、文惠は使者を中国に派遣し、清朝に対して婚を求め、併わせて両広地方を割譲してベトナムに与えることを要

求した。

これは間違いなく清朝の態度を打診する意図によりなされたことであるが、文惠が間もなく病に歿してしまつたので、ベトナム使臣は清廷に対して、この要求を提起することをやめてしまつたのである。

このことによつても、文惠の気宇の大を知りうるのであるが、滑稽なことに、清の高宗はこの彼に対して「忠純」の諡を授けたのである。

又、彼の軍事、作戦に関する能力についても、当時のベトナムには比肩しうる者は一人もないのであつて、フランスの或る学者は彼を指してベトナムのナポレオンとさえ云つてゐる。

仮りに文惠と比較してみると、阮福映は人格、識見、政治度量は劣るものと云わなくてはならない。

阮福映の政治理念は、唯祖業を恢復することにあるのみで、国家・民族に対する関心は甚だ乏しく、かえつて、彼の事跡から推すと彼が西山党に対して復讐するという私怨のみで長期に亘る抗戦を敢えてしたことが証明されるのである。

彼は一片の民族主義的、国家主義的意識をも持つことなく、西山党が阮主を打倒したのだから、これを討つて阮主の昔日の領地を恢復するのだという意識しかなかつたのである。

阮福映の長所は彼の堅忍不拔の性格であり、労苦を厭うことなくベトナム・暹羅の間を往来し、(彼は二度暹羅に亡命している。)暹兵を借りて嘉定を回復しようと企て、失敗し(千七百八十四年

六月、千七百八十四年十二月)、フランスに援助を求めている。彼がバンコックに滞在していた時(千七百八十七年)にはインドのゴアに駐在するポルトガルの総督と折衝して援助を求めようとした。

この意図は暹王の反対にあつて実現しなかつたが、この他、天地会の徒の援助もうけている。

結局、アドラン司教のフランス志願軍の援助により西山党を打倒して、千七百八十二年の統一を完成はしたが、このことはフランスのベトナムに対する干渉と侵略の緒を与え、狼を部屋に引き入れることになり、彼がベトナムを統一してから八十二年の後に、ベトナムはフランスの保護国の地位に転落してしまつたのである。

この点からみても、孰れが民族の英雄であり、孰れが民族にとつての罪人であつたかはすでに自ら明らかで、我々は、今日のベトナム人が阮文恵を尊敬し、阮福映及び、黎の昭統を卑視している理由を了解することが出来るのである。

阮文恵は自己の力量をもつて天下をとり、阮福映、昭統はともに外力に依存して失敗したことによるのである。

次に、外力とベトナムの南北勢力との関係について簡単に触れてみよう。

第一段階の冗長な期間にあつて鄭・阮両主は常に外力と接触したが、鄭・阮両主ともに切実にベトナムの統一を願う意志がなかつたために、外部に対して援助を求める必要というものは余りなかつたといえる。

阮主がオランダに、鄭主がポルトガルにむかつて傾斜していたとは云つても、オランダ人、ポルトガル人はともに慎重な態度をとり、商業上の利益を重視していたため、外力の大規模な干渉という事態を招くには至らなかつた。

では、第一段階の対立を終結させた西山勢力はどのようにして興起したのであるうか。

一般のベトナム史家はみな西山党が独力で政権を獲得したとしているが、これは事実と一致しないのであつて、初期の西山党の急激なる発展は、実は、中国の天地会の徒党季才(閩人)、李阿集(広東人)等中国人の援助に負うているのである。

天地会と西山党の関係は一個の甚だ興味ある問題で、研究を要するものといえる。

後には又、中国の烏船海盜を利用しているが、西山党が外力に依存した程度は非常に少なく、阮福映の場合とは比較にならないのである。

西山勢力が発展していく過程にあつて、二つの決定的な出来事があつた。

千七百八十四年十二月、嘉定において大いに暹羅の軍を敗つたこと、および千七百八十九年正月、昇竜にあつて清軍を撃破したことであり、この二つの事件はベトナムにおける西山党の絶対的な優越性を確立したのみならず、ベトナム史上にあつても大いに重要な意義をもつものであつた。

即ち、この二つの事件によつてベトナムの土着勢力と結合しな

い外力、或いは土着の武装勢力をもつて背景としない外国武装勢力というものは、ベトナムにあつて、たゞ消耗するのみであつて、決してベトナム国内の状態を改変することは出来ないということ吾々は知ることが出来るのである。

ベトナム史上のかゝる例を挙げれば、九百三十年に南漢が曲承美を滅して、ベトナムに侵入し、翌年楊廷芸のために駆逐されたこと、九百三十八年、呉権が南漢軍を破り、矯公羨を打倒したと、九百八十一年、黎大行が宋軍を撃退した等の事実がある。

又、千八百八十四年より八十五年にかけての清仏戦争中にあつてもかゝる例を見出すことが出来る。

当時、ベトナムのトンキンにおける軍事力は完全に崩壊しており、たゞ黒旗軍と清軍の力をもつてフランスに対抗していたのであるが、結局フランスの軍事力に圧倒されてしまった。

ところで、最後に阮福映が西山党を打倒しえたのは阮福映が千七百八十八年に嘉定を恢復して以後、西山党が北方の事態に追われて南を顧みる余裕がなく、再度嘉定を占領出来ずにいたこと、ならびに、この機に乗じて阮氏が経済・軍事・政治の各方面において基礎を定めたことによるのである。

特に、軍事の面において戦闘経験の豊富な部隊を養成し、糧食を確保し、更に火力の甚だ強いフランスの志願軍を加え、内部分裂をきたしていた西山党に対して勝利を得ることが出来たのである。

だから、少くとも過去の歴史上の事実についていえば、ベトナム

十七・八世紀ベトナムにおける南北対立の歴史とその分析

ム of 南北の紛争を解決するためには、たゞ二つの力があるのみである。

一つは、純粋な、全民族の支持をうけた民族主義、国家主義の力であり、第二は国際主義、或いは事大主義の力である。

しかし、この場合、援助を求める主体自身が相当な実力をもっていることが必要で、その力に外力の援助が加わつてこそ、はじめて相手方を打倒しうるのである。

最後に我々はベトナム人の地域観念について注意しなくてはならない。

最近、新聞をみるとベトナムに新内閣が成立するごとに、必ず大臣の数に言及し、トンキン人何人、アンナン人何人等々と伝えられているのを見る。

国家指導委員会の場合はコーチシナ人八名、アンナン人三名、トンキン人三名よりなっているがこれ等の現象は明らかにベトナム人の間に地域的観念が、まだ相当濃厚であることを示している。

しかも、かゝる現象はベトナム社会の各方面においてみられるのであるが、これは一体どんな原因に基づいた現象なのであろうか。

私は、この種の地域観念を形成した最大の原因は十七・八世紀における鄭・阮両氏が南北に相対立していたことによると信じている。

この二百年の政治上の対立・抗争により、トンキンの住民とア

ンナンの住民は自由に往来することが許されず、お互いに隔離されていたし、これがために方言・風俗・習慣の差異が生まれたのである。

阮朝はベトナムを統一したものの、政治力の不足から最後までベトナムのトンキン、アンナン、コーチシナの三地方の融合・団結を促進することは出来なかつた。

そして、それに加えて八十年に亘るフランスの統治をうけたのである。

コーチシナは、その特殊な地位のために、その住民は一種特別な性格に形成され、その人生観、政治観はトンキン、アンナン両地方の住民と同一ではないのである。

この様な状態は政治的な独立という事件に遭遇するや、国民意識の欠乏という事態をまねき——民族意識の欠乏ということではない点に注意——、更に外国勢力の干渉が加わつて再び現在のよ様な南北分争の悲劇を醸成する至つたのである。

ベトナム人は個々人について云えば、非常に活潑、明朗、親切であり、礼儀正しい人たちである。

しかし、民族についていえば、保守的であり、頑冥な排外主義者であるといえる。

これは一千年に亘る中国の統治と、フランスの植民政策により養成されたものである。

ベトナム人は潜在意識の裡にあつて中国人に対して反感を抱いているが、特に中国軍隊に対しベトナム人民は非常に強い悪感情

を抱いているのである。

ベトナムの歴史にあつて、ベトナムの内紛を解決するために、又征服目的のためにベトナムに入つた軍隊はすべて失敗しており、その目的を達成することは出来ず、却つてベトナム人に反感のみを抱かせる結果になつたことを我々は歴史の教訓として学ぶべきであろう。

(本稿は一九六五年六月十八日に香港中文大学新亜研究所においてなされた同大学高級講師陳荆和氏の学術講演の全文であるが、同氏の御諒承のもとに同講演の中国語草稿によつて大沢一雄が訳した。)